


SHOW HEY シネマルーム

ミレニアム ドラゴン・タトゥーの女	
2009年・スウェーデン映画 配給/ギャガ・コミュニケーションズ 153分	
2009(平成21)年12月14日鑑賞	GAGA試写室

 Data
監督: ニールス・アルデン・オブレ グ
原作: スティーグ・ラーソン『ミレニアム1(上・下)ドラゴン・タトゥーの女』(早川書房刊)
出演: マイケル・ニクヴィスト/ノ オミ・ラパス/レナ・エンド レ/スヴェン=パーティ ル・トープ/ゲスタ・ブレデ フォルト/ステファン・サウ ク/ペーター・ハーバー/イ ングヴァル・ヒルドヴァル

👁️👁️ みどころ

日本では『このミステリーがすごい!』大賞が大はやりだが、スウェーデン発の原作は、全世界で2100万部を突破した『ダ・ヴィンチ・コード』を凌ぐ今世紀最大の傑作ミステリー。主人公の一人が名探偵の明智小五郎でもシャーロック・ホームズでもなくドラゴン・タトゥーの奇妙な女であるところがミソ。なぜこんな女がヒロインに?また、雑誌発行責任者の中年男が依頼された調査になぜここまで執念を?

『犬神家の一族』を彷彿させる(?)おどろおどろしいヴァンゲルー族内の確執とは?そして、40年前の失踪事件の真相とは?大ヒットも当然と納得できる緻密な構成と、息もつかせぬスリリングな展開に拍手!こりゃ否が応でも、第2作、第3作への期待は高まるばかりだ。

* * * * *

なるほどこりゃ面白い!原作の大ヒットに納得!

出版不況の中、2009年は村上春樹の『1Q84』(2009年・新潮社刊)が223万部の大ヒットとなったが、北欧のスウェーデン出身の作家スティーグ・ラーソンの処女作にして遺作となった『ミレニアム』シリーズは現在全世界40カ国以上で翻訳され、『ダ・ヴィンチ・コード』『天使と悪魔』を凌ぐ今世紀最大の傑作ミステリーとして、全世界で累計2100万部を売り上げて大ヒットになっているらしい。

日本では『ミレニアム1(上・下)ドラゴン・タトゥーの女』(早川書房刊)として出版されたが、副題となっている「ドラゴン・タトゥーの女」とは、身長150cmの痩身の女性リスベット・サランデル(ノオミ・ラパス)のこと。スティーグ・ラーソンの原作が大ヒットした理由の1つは、黒の革ジャンに鉾打ちのベルト、鼻にはピアス、背中にはド

ラゴンのタトゥーという奇妙な格好のこの天才ハッカー、リスベット・サランデルのキャラクターにある。映画冒頭、精神的な障害を持つ「反社会的人間」というレッテルを貼られたリスベットと、その「後見人」になるサディスト親父との間のバトルが描かれるが、そんなリスベットの隠された非行少女(?)時代の過去とは?

他方、本作の主人公となるのは、大物実業家ハンス=エリック・ヴェンネルストレム(ステファン・サウク)から名誉業損で訴えられた月刊誌『ミレニアム』の発行責任者ミカエル・ブルムクヴィスト(マイケル・ニクヴィスト)。ミカエルは1審で禁固3カ月、損害賠償15万クローネの判決を受けたが、彼はなぜ控訴しないの?また、そんな境遇にあるミカエルに対して、弁護士フルーデ(イングヴァル・ヒルドヴァル)を通じて接触してきたヴァンゲル・グループの前会長ヘンリック・ヴァンゲル(スヴェン=パーティル・トープ)の、ミカエルに対する依頼とは?なるほどこりゃ面白い!原作の大ヒットに納得!

こりゃまるで、北欧版『犬神家の一族』?

日本人にとって、スウェーデンをはじめとする北欧諸国は馴染みの薄い国。せいぜい知っているのは、携帯電話端末で世界最大シェアを誇るフィンランドのノキアやスウェーデンの家具店IKEAくらい?日本でも戦前は三井、三菱、住友、安田という四大財閥があったが、戦後そんな財閥は解体された。しかし、今なお三井グループ、三菱グループなど旧財閥系勢力は存在する。また、日本ではトヨタやソニー、韓国ではヒュンダイやサムスンなど多くの系列企業を抱える大グループ企業は世界中にたくさんある。ヘンリックの弟ゴットフリートの息子であるマルティン・ヴァンゲル(ペーター・ハーバー)が現会長をつとめているヴァンゲル・グループは、フィンランドにおけるそんな大グループ企業らしい。

日本ではダイエーの創始者であった中内功一家は事実上崩壊したし、松下幸之助を創業者とする松下グループ(現パナソニック)では松下家は代表者から離れた。しかし、トヨタではなお豊田章男が代表者となり、豊田一族の支配力が強い。古今東西を問わず「お家騒動」はどこにでもあるもの。既に引退し、今は家政婦とともにひっそりとヘーデビー島のお屋敷に住んでいるヘンリックが、40年前に失踪し以降今日まで行方不明になっているマルティンの妹ハリエット(エヴァ・フレーリング)の調査をミカエルに依頼している姿をみると、ヴァンゲル家に集う30数名のそれぞれの強欲ぶりがよくわかる。こりゃまるで、1970年代の日本で一世を風靡した、横溝正史の『犬神家の一族』の北欧版!?

今やパソコンは必需品!それを使いこなさなければ

ヘンリックは今82歳。したがって40年前に16歳で姪っ子のハリエットが失踪した時のヘンリックは42歳。映画冒頭、毎年送られてくる押し花を見て涙を流すヘンリックの姿が登場するが、さてその送り主は?

ヘンリックが自分の子供のように可愛がっていたハリエットは失踪しただけだから、死亡が確認されているわけではない。しかし、生きていけば何らかの連絡があるはず。すると、毎年押し花を送ってくるのはきっとハリエットを殺害した犯人。ヘンリックはそう推

定してミカエルにその調査を依頼したわけだが、私がびっくりしたのは40年間にわたってヘンリックが集めていたハリエットに関する情報の膨大さ。

ヘンリックの依頼を受けたミカエルはヘーデビー島にあるヘンリックのお屋敷を避けて、離れの小さな家に移り住み膨大な資料との格闘を始めたが、そこではパソコンが絶大な威力を発揮することに。天才ハッカーのリスベットがどうやってミカエルのパソコンに入り込んできたのかは映画をみてじっくりと理解してもらいたいが、写真を中心とする膨大なデータを整理し、推理していくためには今やパソコンは必需品。それを使いこなさなければ何もできない。本作を観て、そんなことを痛感！

回想シーンもしっかり理解しなければ

本作は153分の長尺だが、全体の構成がしっかりしているうえ1つ1つのシーケンスの問題意識が鮮明だから、決して飽きることなく集中して鑑賞することができる。しかし、本作で注意しなければならないのは、再三登場してくる回想シーン。回想シーンではミカエルの幼い頃の姿やリスベットの幼い頃の姿が登場するが、それらはそれぞれ、誰に対して何をしているの？

他方、北欧の女性は彫りが深くて美人。それが通説だが、写真の中だけで再三登場する16歳のハリエットやその従姉妹にあたる仲良しのアニタをみていると、そのことがよく

わかる。また雑誌『ミレニアム』のもう一人の編集長であり、かつミカエルの愛人でもあるエリカ・ベルジュ（レナ・エンドレ）も少し年をとっているとはいえ、かなりの美人？そんな風に本作では北欧美人アレコレの鑑賞も1つの楽しみだが、ホントの楽しみはもちろんサスペンス。

ミカエルが依頼を受けて調査を開始したのはハリエットの失踪事件だが、それは既に40年前の出来事だから

その調査は大変。また、観客が現在の動きと40年前の回想シーンを連動して理解するには、40年間の時間差を克服することが必要だ。40年前、ハリエットは「会って話したい」とヘンリックに語っていたにもかかわらず、なぜこつ然と姿を消したの？膨大な写真を分析した結果ミカエルが最初に気付いたのは、何かを発見して怯えているハリエットの表情だが、その視線の先には一体ナニが？



ミカエルの行動力の源泉は一体どこに？

本作の一方の主人公ミカエルのキャラクターは、きっとスウェーデンの雑誌社の編集長をつとめていた、原作者であるスティーグ・ラーソン自身の像と重ね合わせながらつくられたもの。ミカエルがヘンリックからの依頼を引き受けたのは、多額の報酬以上に別の魅

力があつたから。それは、ハリエツト失踪の謎を説き明かしハリエツト殺害の犯人を特定したならば、ミカエルが1審で敗訴した大実業家ハンス＝エリック・ヴェンネルストレムのペテン性を証明するネタを提供するという何とも嬉しい約束をヘンリックがしてくれたからだ。

ミカエルには若い時のある活躍によって「名探偵カッレ」というあだ名がついていたくらいだから、記者としての鋭い勘と推察力を頼りに素人ながら調査業務、探偵業務に長けていたことにまちがいない。それは、本作にみる膨大な資料との格闘と、旺盛な行動力をみれば明らかだ。また、そこに超人的な映像記憶能力をもつリスベツトが協力者として加わったわけだから、こりゃ鬼に金棒。とはいえ、コトが順風満帆に進み、謎の解明と犯人の特定がスナナリ実現したのでは波乱万丈のサスペンスとしての面白味はなくなってしまふ。少しずつ謎が解き明かされていくにつれて、ミカエルに迫ってくる危険とは？ミカエルに向けて発砲された猟銃の主は一体ダレ？さらに違法行為と知りつつ強引な調査行動に出たミカエルがある家の中で出会った意外な人物とは？手に汗を握るスリリングな展開に、きつとあなたは引き込まれていくはずだ。

ところで、なぜミカエルはそこまで危険な行動を？その底流には欧米流の「契約は遵守しなければならない」という観念があることは明らかだが、本作にみるミカエルの執念はそれをはるかに超えている。そんなミカエルの行動力の源泉は、一体どこに？

一筋縄ではいかない展開 第2部、第3部への期待

本作のプレスシートには登場人物の相関図があるが、本作の面白さを理解するにはこの人物相関図を正確に理解することが大切だ。前述のように、本作では40年の時間差があるため回想シーンが多いうえ、ヴァンゲル・グループの前会長ヘンリックの兄弟でナチズムに傾倒している長兄リカルド、次兄ハラルド（ゲスタ・ブレデフォルト）、弟のゴットフリートの姿やゴットフリートの娘ハリエツト、ハラルドの娘アニタなどのキャラが写真でしか見えないため、それを正確にフォローするのはかなり大変。ハリエツト失踪の驚くべき真相が明らかになるのは、当然本作のラスト近くになってからだが、そこに行き着くまでには日本人には苦手な聖書の言葉を絡めた何とも血なまぐさい犯罪の数々が……。なるほど、こんな一筋縄ではいかないストーリーだったのか。真相解明のドラマが終わるとふとそんな安堵感を覚えるが、実は本作はそこがジ・エンドではないからお立ち会い！

そういえば、1審で禁固3カ月の有罪判決を受けたミカエルの刑の執行はどうなったの？ヘンリックからの依頼を受けた調査が完了したら、リスベツトはどこかに消えてしまうの？さらに、ミカエルはヘンリックから大実業家ヴェンネルストレムに関する秘密の資料提供を受けてヴェンネルストレムに対する反撃を開始するの？まだまだ、そんなこんなたくさんのテーマがあつたはずだ。

さて、本作のラストに向けてそれらはいかなる展開を？さらに、スウェーデンやデンマーク等では2009年9月に第2作『火と戯れる女』が、11月に第3作『眠れる女と狂卓の騎士』が公開されたいから、そこにはさらなる期待が。

2009（平成21）年12月15日記